

令和 2 年 7 月 9 日現在

機関番号：14302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K16828

研究課題名(和文) 元代～明代初期における日中交流の歴史的変遷の研究

研究課題名(英文) The Maritime East Asian Networks in the Yuan-Ming Period

研究代表者

中村 翼 (NAKAMURA, Tsubasa)

京都教育大学・教育学部・講師

研究者番号：70748970

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：東アジア海域史研究は1980年代以降、大いに進展した。そのなかで、11～14世紀前半は国家のゆるやかな貿易管理体制のもと海商が活発に活動した時代とされ、14世紀後半以降は明朝の厳格な交易制限のもと交流が低迷した時代とみなされた。しかし、海域世界の様相の探究は、転換点とされた14世紀中頃を境に別々の研究者によって主に担われたため、14世紀～15世紀前半にかけての海域世界の秩序変容の実態は十分に解明されていなかった。そこで本研究では、14世紀前半以前に日中間を結んだ海商およびその後継者が、それ以後の時代の変化にいかに対応し、またその動向が次代の海域世界の秩序形成にいかなる影響を与えたかを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

東アジア海域史を描く際、宋元交替(14世紀半ば)は時代の分水嶺としてつねに強調されてきた。しかし、それ故に14世紀中頃を前後する時代で研究者間の分業がなされ、研究史上の論点や分析対象、関心の所在に違いがあるため、時代の転換、秩序の変容なるもの実態は必ずしも明確ではない。かかる問題は、日本史上、当該期が中世の前期・後期をまたぐ時代であることも影響しているように、とはいえ近年の日本史学では南北朝期を前後する時代の連続・断絶の様相を解明する研究が相次いでいる。本研究はこうした研究潮流をふまえ、海域史の観点から現状の克服を指向するもので、日本史・海域史を架橋する視座を鍛えることにも寄与する。

研究成果の概要(英文)：The study of a history of Maritime East Asia has made remarkable progress since the 1980s. As a result, the Song and Yuan period attracted attention as an era in which merchants were active under the nation's loose trade control system. On the other hand, the early Ming period was regarded as an era when exchanges were sluggish under the strict trading restrictions of the Ming Dynasty. However, while, researchers targeting the first half of the 14th century and those targeting the latter half of the 14th century were mainly carried out by different researchers, the reality of the transformation of the Maritime East Asia, which has a turning point in the middle 14th century, has not been fully understood. Therefore, in this research, to solve this problem, I investigated how the maritime merchants who were mainly active on the route between Japan and China in the 11th to 14th centuries expanded into the Korean Peninsula and the Ryukyu Islands from the mid-14th century.

研究分野：日本史

キーワード：日宋交流 日元交流 日明関係 南北朝期 倭寇 海禁 蒙古襲来 琉球王国

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本を含むアジアの海域交流史は 1980 年代以降、一国史的理解の克服が目指されるなか、東洋史学など隣接分野との共同研究を通じ、長足の進展を遂げた。なかでも 11 世紀～14 世紀前半は、日本・高麗・中国(宋元)の柔軟な貿易管理体制のもと、海商による交易活動が活性化された時代として注目されてきた。ところが、14 世紀後期以降については、明朝が海禁政策をとり、民間交流を禁止したことで交流は低迷し、海禁に応じない勢力は「倭寇」として封じ込められていったとみなされる。このように、14 世紀中頃を転換点として海域交流のあり方は大きく変容するわけだが、14 世紀中期という共通の空白を残したまま、日宋/元交流史と日明関係史とが別々の研究者によって主に担われたため、両者をつなぐ視座に乏しく、結果として 14 世紀中頃の变容の実態が十分に解明されていなかった。

2. 研究の目的

本研究では、日本を含む東アジア海域交流の 14 世紀中頃を転換点とする変容を明らかにすることを目的とした。そこで日宋・日元交流の主たる担い手のうち海商と僧侶に注目し、彼らおよびその後継者が、14 世紀後半～15 世紀前期における環境の変化にいかに対応したかを追究するとともに、そうした彼らの動きが海域交流のあり方にいかなる変容を生み出したのかについて、探究した。

3. 研究の方法

11 世紀～14 世紀において日本を含む東アジア海域交流の幹線は、寧波(宋元)から礼成江(高麗)・博多にそれぞれ伸びる航路である(中朝間は、山東半島から礼成江に伸びる航路も重要)。そこで当該航路を担う海商のうち日本に拠点をもつ者の実態を探るため、各種文献資料から当該期の日本の政治権力がしいた貿易管理体制を解明することを試みた。その上で、14 世紀後半以降、寧波・博多を専ら往来した海商が、朝鮮半島および琉球列島へも進出していく様相を跡付けることを目指した。その際には、朝鮮半島方面については高麗・朝鮮王朝の文献資料を、琉球列島方面については明朝の文献資料とともに近年研究の進展が著しい琉球列島の考古学の成果をふまえることを意識した。くわえて、中国沿岸および朝鮮半島各地でみられる「倭寇」およびそれへの政治権力の対応を探ることで、寧波・博多航路の担い手およびその後継者の動向を規定する国際環境を把握することにつとめた。

4. 研究成果

本研究では、上記の研究目的を達成するため、14 世紀前半以前における日本をとりまく東アジア海域交流の特質をまず確認し、日本における鎌倉幕府倒壊とその後の内乱、大陸における元末内乱から明初の海禁＝朝貢体制の確立のインパクトを見極め、それに対して海域交流の主要な担い手(海商・僧侶など)や国家・政治権力がとったリアクション、ならびにそれらの相互作用によって起きた秩序変容について、探究した。ただし、研究活動の結果、当初予想していなかった結論・成果が生まれるなど、すべてが～に直結する成果ではないので、以下では便宜上、～および「その他」にわけてまとめていく。

14 世紀前半以前の海域交流の特質

本研究の前提として、すでに概ね収集していた平安時代日本の貿易管理体制に関する資料について、平安時代の貴族社会論や財政史研究との接続を意識して分析を行った。その結果、当初は 14 世紀の「分水嶺」以前のあり方が、日本朝廷の貿易管理制度(年期制と官司先買制)が放棄される 12 世紀中頃より本格的に形成されると考えていたが、むしろその起点は 11 世紀段階に求めるべきとの結論に達した(『平安中期における貿易管理体制の変容』『待兼山論叢(文化動態論編)』49号、2015年)。この点は、なお実証的・論理的な詰めを要すると考えるが、これについては今後の課題としたい。

また、上記の論文で検討した博多・寧波航路は、14 世紀以前の東アジア海域交流の基幹線といえるが、これとは別に対馬海峡をまたいで九州北部(博多・大宰府地域)と朝鮮半島南部をつなぐ地域間交流がある。これの実態をおさえることは、14 世紀後半以降の「倭寇」の実像を捕らえる上で必須の課題であるため、本研究では、10 世紀～14 世紀前半の日麗関係史の史料を収集し、テキストデータ集を作成した。また、対馬海峡域をまたぐ地域間交流は、九州北部から奄美・沖縄諸島につながるネットワークに接続するが、これについては近年、考古学からの成果発表がめざましいので、琉球王国形成の前史を把握する前提作業として、文献史学の立場からこれを咀嚼し、論点の整理を行った(『琉球王国の形成と東アジア海域世界』秋田茂・桃木至朗編『グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育』、大阪大学出版会、2020年収載)。

14 世紀中頃における海域世界の秩序崩壊

本研究では、で論じた海域世界の秩序が、元末明初の内乱に端を発する東アジアの混乱およ

びそれへの対抗構想たる明朝の専制体制（海禁＝朝貢システムもその一環）の構築をうけ、どのように崩壊していくかの見通しをつけた。その際、注目したのは、混乱する中国本土からアジアの各地に逃れる人々であり、こうした移民・難民の動きを斡旋した集団であり、そして、「倭寇」と呼ばれる人間集団である。これらは複雑に連関・結合しており、かつ一枚岩の集団ではないため、かえって「多様な出自を持つ人々の集団」等として平板な総括されがちである。そこで本研究では、1350年代～1380年代における日本・元（明）・高麗の国家・政治権力が、当該期における人々の移動に対してとった対応を段階的に検討すると共に、中国沿海地域および朝鮮半島における「倭寇」事例の網羅的検出を行い、それを地図上に落とししていく作業を行った。本作業は増訂の余地を多く残すものの（とくに地名の現地比定の作業は困難を要しており、今後の作業によるところが大きい）、カウントの仕方の問題（検討不可能）かもしれないが、先行研究（田中健夫・田村洋行・鄭梁生ら）とは違う結果を得ることができた。また、これにより「倭寇」が明朝にとって現実的な脅威となっていたのは1374年頃までとの見通しを得ているが、それが意味するところは十分に解明できていない（以上の成果の一部は、「東アジア海域世界の境界人と政治権力：一四世紀の分水嶺を考える」『日本史研究』679号、2019年および、前掲「琉球王国の形成と東アジア海域世界」として発表）。

14世紀後半～15世紀前半における秩序の再構築

14世紀前半以前において東アジア海域世界を行き交う富は、日本と関わるものについていえば、量的には博多・寧波が基幹であった。しかし、でみた秩序の崩壊や明朝の海禁＝朝貢システムの構築をうけ、博多・寧波間の往来は限定的なものとなった。そうしたなか、日本と朝鮮・琉球をむすぶ交流がこれにかかわって活性化するのであり、このことは先行研究でも既に指摘されている通りである（佐伯弘次ら）。ただし、日明貿易の低迷を前提とした代替路の模索という方向性については、14世紀後半の明初体制の構築をうけてのものか、1410年代以降の足利義持による遣明船派遣中断によるものかは、不分明であると考えた。そこで、本研究では、日宋・日元貿易の担い手およびその後継者（主に博多を拠点とする海商）をとりまく環境の変化を検討することとした。

その結果、15世紀初頭に永楽帝・足利義満の思惑が一致したなかで再開された遣明船が持つ貿易上のプレゼンスは、15世紀中頃以降の遣明船のそれとは比較にならない程大きく、むしろ日宋・日元貿易期との連続性が強いとの見通しを得た。あわせて、「琉球国」という明への朝貢主体の出現（1372年）は、当初は日明外交を前提とせずとも日本に拠点をもち海商が明とアクセスを持つための方法として、沖縄本島の政治権力と博多を拠点とする海商の思惑が一致するなかで起きた事態と理解できるが、沖縄本島における王権形成と博多の海商との関係も、1370年代と遣明船再開期（1404～1411年頃）とでは温度差があるとの見通しをえた（以上、主として前掲「東アジア海域世界の境界人と政治権力：一四世紀の分水嶺を考える」）。なお、この問題をめぐっては、明朝の「倭寇」対策および1380年代以降の華人の動向と関連づけて論じる必要を感じているが（前掲「琉球王国の形成と東アジア海域世界」）、引き続き検討していきたい。

また、対馬海峡をまたぐ日朝海域を行き交う富は、14世紀後半以降、日本の政治権力と結んだ海商によってなされた日中貿易の代替路の模索という動きのなかで、前代より格段に増加した。しかし、同じ頃には「倭寇」禁圧という政治課題もあり、朝鮮半島および日本の国家・政治権力は、安定した交易を維持しうる秩序の構築を課題とするようになった。「倭寇」禁圧のための制度設計とその沿革は先行研究が明らかにしているが（中村栄孝・長節子ら）、本研究では、当該海域を舞台に生活する人々が、朝鮮半島の国家および官吏から「倭寇」と認定され、禁圧されるメカニズムを意識的に解明しようと試みた。その際、「倭寇」をめぐる明朝と高麗・朝鮮王朝の関係と、「不臣之国」日本をめぐるモンゴル帝国と高麗の関係との関係を突き詰めることが重要なのではないかと考えているが（主として、「モンゴル帝国の東アジア経略と日中交流」秋田茂・桃木至朗編『グローバルヒストリーと戦争』、大阪大学出版会、2016年および前掲「東アジア海域世界の境界人と政治権力：一四世紀の分水嶺を考える」）、大きな問題であり、今後の研究課題としておきたい。

その他

本研究では、当初、日明関係樹立を支えた僧侶のネットワークの解明を目指し、春屋妙葩の周辺を探る目的で、丹後隠棲中（1374年）に春屋が円覚寺の仏牙舍利を手にした「史実」の意味を考察しようとした。しかしながら、円覚寺の仏牙舍利をめぐる言説について、新出史料を含めた諸本の整理・分析を行うなかで、これを史実とみなしうるかという点で根本的な疑問を抱くようになった。結果として、源実朝が南宋から将来したという円覚寺仏牙舍利の由来譚をめぐる研究を前進させることができた。（「源実朝の仏牙舍利将来伝説の基礎的考察：「円覚寺正統院仏牙舍利記」諸本の分析を中心に」『アジア遊学』241号、2019年）

なお、本研究の直接的な課題とは異なるが、最新の研究成果をふまえた歴史教育の刷新という課題意識から、所属している高大連携歴史教育研究会の活動と関連していくつかの提言を行った（「中学校歴史教科書と日本史研究者の課題：育鵬社版の日本中世史記述の検討を通じて」『歴史科学』228号。中村翼・矢部正明「歴史系用語精選の意義と課題」『歴史評論』828号、2019年）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中村 翼	4. 巻 241
2. 論文標題 源実朝の仏牙舍利将来伝説の基礎的考察 「円覚寺正統院仏牙舍利記」諸本の分析を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 155,166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村 翼	4. 巻 679
2. 論文標題 東アジア海域世界の境界人と政治権力：一四世紀の分水嶺を考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本史研究	6. 最初と最後の頁 34-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村 翼・矢部 正明	4. 巻 828
2. 論文標題 歴史系用語精選の意義と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 34-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村翼	4. 巻 228
2. 論文標題 中学校歴史教科書と日本史研究者の課題 育鵬社版の日本中世史記述の検討を通じて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 歴史科学	6. 最初と最後の頁 7,14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村翼	4. 巻 647
2. 論文標題 書評 村井章介著『日本中世の異文化接触』	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本史研究	6. 最初と最後の頁 86,93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村翼	4. 巻 49
2. 論文標題 平安中期における貿易管理体制の変容	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 待兼山論叢 (文化動態論編)	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 NAKAMURA Tsubasa	4. 巻 21
2. 論文標題 The Maritime East Asian Networks in the Song-Yuan Period	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 The Movements of the People, Goods, Culture under the Political Situation in Eurasia: Working Paper	6. 最初と最後の頁 49-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 中村 翼
2. 発表標題 東アジア海域世界の境界人と政治権力：14世紀の分水嶺を考える
3. 学会等名 2018年度日本史研究会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村 翼
2. 発表標題 琉球王国の形成と倭人・華人
3. 学会等名 第10回藤陵史学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村 翼
2. 発表標題 成立期の琉球王国と倭人・華人
3. 学会等名 2018年度倭寇の会久高島合宿（海域アジア研究フォーラム）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村翼
2. 発表標題 Migrants, Refugees, and Slave Trade: Crossing Maritime East Asia between the 11th and 14th Centuries
3. 学会等名 Workshop: Slaves, Merchants and the Powers in Medieval Eurasian Trade Networks (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中村翼
2. 発表標題 高校日本史用語の精選の狙いと課題 日本史研究者に向けて
3. 学会等名 鎌倉遺文研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中村翼
2. 発表標題 「博多における権門貿易」の確立 11・12世紀の日宋貿易
3. 学会等名 近世史フォーラム12月例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中村翼
2. 発表標題 歴史系用語精選、何が問題か？
3. 学会等名 2017年度京都高等学校社会科研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村翼
2. 発表標題 中世日本対外関係史・仏教史からみた「遣明船の時代」
3. 学会等名 『日明関係史研究入門 アジアのなかの遣明船』合同書評会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 中村翼
2. 発表標題 モンゴル・インパクトと日本 戦争・交易・文化交流
3. 学会等名 昭和女子大学国際文化研究所主催国際シンポジウム：ユーラシアにおけるモンゴルのインパクト（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 NAKAMURA Tsubasa
2. 発表標題 The settlements of Maritime Merchants in Japan and the Song/Yuan-Japan trade
3. 学会等名 The third Congress of the Asian Association of World Historians (国際学会)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 中村翼
2. 発表標題 平安中期における貿易管理体制の変容
3. 学会等名 第165回博多研究会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 NAKAMURA Tsubasa, FUJITA Kayoko
2. 発表標題 How to Locate Japan in Global History: The Eurasian Protected Zone or Sino-centred East Asia?
3. 学会等名 Writing Global History from Southeast Asian Perspectives: In Honor of Professor Victor Lieberman 's 70th Birthday (国際学会)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 中村翼
2. 発表標題 中学校歴史教育と日本史研究の課題
3. 学会等名 大阪歴史科学協議会 1月例会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 NAKAMURA Tsubasa
2. 発表標題 Japan's Admiration for "China" and East Asian Networks in the Song-Yuan Period
3. 学会等名 Global History Workshop: "Globalization from East Asian Perspectives" (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 中村翼
2. 発表標題 宋元代の中国に渡った日本の禅僧
3. 学会等名 グローバル日本研究国際シンポジウム 開く日本・閉じる日本 「人間移動学」事始め (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 秋田茂(編)、桃木至朗(編)、市大樹、久保田裕次、中嶋啓雄、岡田友和、池田一人、向正樹、中村翼、高木純一、山本千映、岡田雅志	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 358
3. 書名 グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育	

1. 著者名 秋田茂(編)、桃木至朗(編)、田中仁、中嶋啓雄、中野耕太郎、左近幸村、岡田雅志、後藤敦史、古谷大輔、伊川健二、中村翼、市大樹	4. 発行年 2016年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 352
3. 書名 グローバルヒストリーと戦争	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----